富山大学極東地域研究センター
CFES News Letter
Center for Far Eastern Studies, University of Toyama
2017.09 発行
Vol.27

Ⅰ　国際共同研究による富山湾のカニ調査

本年の 6 月末にデンマークの University of Southern Denmark から Brooks Kaiser 教授を中心とする研究チームが富山を訪れました。目的はデンマーク政府からの競争的資金を受けて行っている国際的なカニの取引に関する研究の日本での現地調査を行うためでした。プロジェクト参加メンバーはデンマーク、アメリカ（アラスカ）、日本、韓国の研究者で、北極を囲むような体制で構築されています。

写真 1：新湊漁港にて。

富山県、射水市等にご協力頂きまして、新湊漁協にて漁業関係者からお話を伺うことができました。あいにくカニのシーズンは終わったばかりでしたが、私自身はこれまでカニ取引を研究したことがないため、大変貴重な経験を得ました。漁業資源の減少は国際的な課題ですが、ノルウェーに代表されるように北欧諸国はその中でもうまく管理が行われている代表的な地域です。そのため、北欧における漁業調整と違法漁業対策について逆質問を受けました。その回答の一つで私の心に残ったのは、デンマークやノルウェーの漁業者にとって違法操業のインセンティブは小さいというものです。なぜなら国内にカニのマーケットがないため、鮮度を保つ高度な加工工場を通して国際市場に輸出しなければお金にならないのです。他の漁業者の目を盗んでとったとしても捌く先がないのです。日本では禁漁しても他の漁業者がとるだけという危機感を多くの漁業者がもっています。同じ政策でも背後にあるマーケットの構造次第で効果が大きく異なる可能性があることを肌で感じました。

（文責：山本雅資）

Ⅱ　日露青年交流事業日本語学習青年グループの訪問

2017 年 7 月 11 日、極東地域研究センターでは、経済学部とともに日露青年交流センター日本語学習青年グループの訪問を受けました。2016 年 12 月の日露首脳会談において大学間交流、青年交流、スポーツ交流を拡大するとともに、地域間交流を活性化し日露関係の更なる発展につなげていくことが確認されましたが、本事業はその具体化に欠かせない事業であり、ロシアとの繋がりの強い富山大学においてロシアのみなさんを迎え入れることができたことは本学にとっても意義深いと感じます。また、今年は 1992 年に富山県がロシア沿海地方と友好提携し 25 周年にあたります。こうした機運をとらえ、ロシアに 6 箇所開設されている日本センターなどで日本語を学習した経験のある 20 代から 30 代の青年たち 20 名が本学を訪問しました。

経済学部堀江ゼミ生 2 名および人文学部生 1 名がロシア訪問団を歓迎し、富山紹介と日本の「かわいい」文化の紹介を英語で発表するとともに、日露パイプライン構想について学生研究発表をロシア語通訳付きで行いました。富山の魅力の紹介は、あいにく雨の中での訪問となったロシアのみなさんに富山を知って頂く良い機会になり、日本のかわいい文化については、ロシアのみなさんとも共有できるものである一方、微妙なニュアンスの違いを学生の視点から紹介する楽しい企画でした。実現には課題が多い日露パイプライン構想の研究発表は、富山大学の学生の立派な発表にロシアのみなさんも感心していました。

写真 2：経済学部大会議室で集合写真。

ロシアの青年訪問団の方々は、富山滞在時間が短く、県内を見て回ることができなかったようでしたが、富山の魅力の紹介のおかげで、日本に住むなら富山がいいという参加者も多くいたとの謝辞を日露青年交流センターから頂きました。

懇親会では、経済学部生も数多く参加し、日露友好の夕べを楽しみました。片言の日本語と英語ですぐに打ち解け、その後の交流も進んでいるようです。今後も機会があれば、日露交流のお手伝いができればと思います。

（文責：堀江典生）

Ⅲ　極東ロシアでの野外調査 2017

極東ロシア・アムール州中北部に位置するゼイスキー自然保護区及びその周辺において、自然保護区の設定による森林伐採や森林火災の抑制効果を検証するため、今年度も昨年度とほぼ同じメンバーで日露合同の野外調査を実施しました。現地には約 1 週間の滞在ですが、前半は 2 泊 3 日で登山を伴う自然保護区内の調査です。落葉広葉樹とカラマツの混じる林を抜けて、エゾマツが優占する林まで標高を上げ、ハイマツも混じる亜高山帯にあるベースキャンプに宿泊しました（写真 3)。調査中は雨も混じる天候でしたが、野外活動をサポートしてくれるこの基地の存在のお陰で、熊に遭遇することもなく、無事に前半の調査を終えることができました。

写真 3：自然保護区北西部のエゾマツ林内にあるベースキャンプ。

後半は、自然保護区外の調査です。今年度の植生調査は、米国のランドサット衛星画像から予め調査地を絞り込み、森林火災が近年起こった場所を中心に行いました。実際に調査を実施してみると、衛星画像では分からなかったことが見えてきます。火災後に更新したシラカンバの幼木は、その大半が地上部の枝先が全て枯れ、一方で地際付近に葉が集中的に生えていました（写真 4)。森林火災の再来間隔が短く、繰返しやってくる火災の影響で地上部がダメージを受け木々が高くなれないこと、しかし生き残った地下部から芽を出して再生すること等が分かりました。シラカンバの幼木は強かだな、と感心し、植生調査を続けました。

写真 4：森林火災後の植生景観。

（文責：和田直也）

Ⅳ　地域研究四方山話　中国の夢:理想と現実

外国語の習得の難しさの一つに、辞書の訳語ではわからない微妙なニュアンスを使い分けなければならないということがある。従って辞書に掲載されている「例文」からニュアンスの差異を感じ取らねばならない。ふっとそのことを思いだしたのは中国の習近平が「夢」という言葉を使っていたからであった。習近平は 2012 年に総書記に就任した後にしばしば「中国の夢」としての「中華民族の偉大なる復興」という言葉を口にした。それを具現化するために 2013 年に習近平が提唱したのが「一帯一路」（シルクロード経済ベルト、海のシルクロード）であり、周辺諸国にも中国は経済的影響力を及ぼそうとしている。

日本人は「中国の夢」という言葉をきいたとき、American Dream のように、努力をし、幸運に恵まれれば実現するものと考えてしまう。しかし中国の方にいわせると『『理想』は実現するものだが、『夢』は叶わないもの」だという。習近平にとって 2012 年の時点では「夢」であったものが、中国が名実ともに大国になって「理想」になったと見ているのだろうか。2015 年には購買力平価でみた中国の GDP は、米国を抜いて世界第一位となり、国際社会での発言力も大きくなっている。ニュースの見出しだけみればいまや中国が「パリ協定」の守護者のように見える。2017 年 10 月に開催される党大会で、習近平はより強い権力を得ていよいよ「理想」を実現しようとしているのかもしれない。

中国共産党には党大会の時点で 68 歳であれば再任されないという不文律がある。共産党では「死ぬか、失脚するか」しない限り、その地位に連綿とするのが普通であったものを、鄧小平が自らも引退する形で、盟友たちも引退させて導入したものであった。習近平は 3 期目（2022 年以降）を狙ってこの制度を反故しようとしているとも伝えられている。

「中華民族」という言葉にも説明が必要かもしれない。中中辞典によれば「我が国の民族の総称」とある。人口の 92%を占める漢民族の他 54（ないし 55）の民族の総称ということになる。「偉大な中華民族」を支えているのは「大一統」（大きいことはいいことだ。分裂は悪）の考えであり、いかなるコストを図っても独立は許さないという考えである。

「中華民族の偉大なる復興」を「夢」のままで終わらせず、「理想」にしようとしたとき、中国にとって教訓（中中辞典によると、失敗や錯誤から得る経験や認識）のひとつになるのかもしれない。

（文責：今村弘子）

連絡先住所：〒930-8555　富山県富山市五福３１９０　富山大学 研究推進機構 極東地域研究センター
電話：076（445）6510　ファックス：076（445）6520
ホームページ <http://www3.u-toyama.ac.jp/cfes/index.html>